

100歳の敬老者に 祝品を贈呈



若松アサ子さん

菅キクイさん

9月16日、高久町長から100歳の敬老者に祝品が手渡されました。金色のちゃんちゃんこを着て、出迎えてくれた菅キクイさん（新夕狩）は、好き嫌いせずなんでも食べるのが長生きの秘訣と教えてくれました。健康に気をつけて、運動していますという若松アサ子さん（新夕狩）は、はつらつとしていました。同じ施設で過ごしているお二人は、家族や一緒に入所している友人、施設のスタッフの方みんなから祝福され、とてもうれしそうです。

高久町長は「風邪に気をつけて、まだまだ長生きしてください。」と一人ひとりに声をかけ、祝品を手渡しました。みなさん、贈呈された祝品を大切に手にしていました。



秋元キヨさん



渡邊マサさん

那須の歴史余話(43) 伝馬制と宿の負担

江戸時代の奥州道中には宿が作られ、荷物の継立を行う問屋場が設置された。25頭の馬（馬子を含む）と人夫25人を常備することが義務付けられていた。このうち5頭、5人は緊急公用のためのもので、通常は20頭、20人であった。宿に割り当てられたこれらの人馬は、間口によって区分されていた。例えば、本役は馬1頭（馬子含む）、半役は人1人、このほか四半役などが宿の家々に課せられたのである。四半役は2軒で半役となる。半役は2軒で本役となる。

の宿もある。那須地方の宿はいずれも一人である。

問屋場には、問屋をはじめ、その助役の年寄、事務担当の帳付（書記）が詰めている。そのほか、馬指とか人馬指という、人馬に荷物を振り分ける者がいる。問屋や年寄は通常の時には交代で出勤するが、大名などの通行の際には全員が詰めるのである。帳付や馬指は毎日全員が勤務する。

公用人馬の使用はどのくらいあったのであろうか。弘化・嘉永年間の「人馬御届遺高」によると、仙台（藩）は100人、88頭、会津・佐竹（藩）は63人、63頭、南部・白河・二本松・津軽・庄内・上杉（藩）は50人、50頭、その他は25人、25頭である。このほか、商人が扱う物資の運搬などを含めると相当数の荷駄が往来したことが窺える。

荷物の継ぎ立ては、次の宿までに限られ、いくつもの宿を通して運ぶことは許されていなかった。このため、芦野宿からは南へ越堀、北は白坂までである。問屋は、馬、人の手配を担い、宿の人馬が不足するときは、助郷の村へ人馬の徴発を行うのである。



間口より伝馬の負担を担ったという。写真は芦野宿山本屋（間口6間半）